

1 活動名 文化・教育行政の先進地視察（豊岡市）

2 調査の目的

（1）本市における課題

多様な芸術・文化に恵まれている本市だが、その地域資源を教育などの領域と掛け合わせるための制度設計が不十分である。

（2）調査の必要性

豊富な地域資源として多様な芸術・文化を教育などと掛け合わせ、次世代を担う子どもたちの学びの充実を図るための制度設計が必要である。具体的な実践状況について、直接当事者から聴き取るため、現地調査が必要である。

（3）調査項目

学校現場における演劇を取り入れた教育施策の現状について 他

3 調査地選定理由

（1）豊岡市

平成29年度にコミュニケーション教育として演劇的手法を取り入れた授業を市内すべての公立小中学校で導入した実績がある。

4 調査結果

（1）実施日 令和7年1月20日～令和7年1月22日

（2）出席者 1名 菊地徹

（3）豊岡市（令和7年1月20日～令和7年1月22日）

現在も、豊岡市立の全小中学校において、小学6年生と中学1年生で年7時間ずつコミュニケーション教育として演劇的手法を取り入れた授業が実施されているほか、令和4年度以降は全公立校の小学1年生で年3回、令和6年度以降は全公立校の小学2年生で年2回、非認知能力向上対策事業として演劇ワークショップが実施されており、アンケート調査などの結果、児童生徒の非認知能力の向上が確認されている。（詳細別添）

（4）成果・所感等

他者を演じる演劇的表現活動が、自分と異なる他者を認識し、違いを受け止め、集団での合意形成を図る、非認知能力の向上に資する、教育現場での実践となっている状況を確認できた。本市の学校教育ならびに生涯教育、あるいは文化行政に対して活かせる視点について、さらに研究を深めるとともに、教育委員会や関係部局との意見交換も重ねていきたい。

5 政務活動費

（1）使途項目 調査旅費

（2）支出額 71,890円（日当 9,000、宿泊費 29,600、交通費 33,290）×1人 ※うち37,288円を政務活動費に充て、残額は私費で負担

令和7年3月31日

活動報告書
- 豊岡市視察 -

松本市議会議員
菊地徹

1 はじめに

この度、文化・教育行政の先進地視察として、平成29年度に演劇的手法を取り入れた授業をコミュニケーション教育と位置付け、市内すべての公立小中学校で導入した実績のある兵庫県豊岡市を訪ねました。これは、本市が多様な文化・芸術に恵まれている一方、その地域資源を教育などの領域と掛け合わせる制度設計は不十分である、という課題認識に基づき、豊富な地域資源である文化・芸術を教育などと掛け合わせ、次世代を担う子どもたちの学びの充実を図る制度設計を進める際の要点を把握すべく、この取組みにおける先進自治体と捉える豊岡市での具体的な実践状況について、直接当事者から聴き取ることが必要と考え、現地調査を行ったものであります。

現地では、豊岡市教育委員会に伺い、学校現場における演劇を取り入れた教育施策の現状について説明を受け、意見交換を行いました。その前後にも、豊岡市において文化と教育の橋渡しを実現するうえで布石となったであろう、城崎国際アートセンター、芸術文化観光専門職大学、そして、それら一連の事業を牽引した中貝宗治前豊岡市長が現在も「深さをもった演劇のまちづくり」に取り組む、豊岡アートアクションを、それぞれ訪問しているため、以下、訪問順にその成果および所感を述べ、調査結果を報告します。

2 城崎国際アートセンター

城崎国際アートセンターは、かつての県営施設、城崎大会議館をリニューアルした、豊岡市直営のアーティスト・イン・レジデンス施設です。平成23年3月策定の兵庫県第2次行財政構造改革推進方策（第2次行革プラン）に基づき、施設が県から市に移された際、当時の中貝宗治市長が演劇やダンスの滞在制作の場として活用する基本計画を策定し、平成26年4月に開館。初年度のみNPO法人に運営を委託していましたが、翌年には同施設を地方創生の文化的戦略拠点と位置付け直営化し、劇作家・演出家の平田オリザさんを初代芸術監督に迎えました。舞台芸術に特化した点が最大の特色で、開館以来、国内外から多彩な表現者が訪れ、滞在制作に取り組んでいます。

現地では、志賀玲子館長はじめ、プログラム・ディレクターの吉田雄一郎さん、地域連携ディレクターの橋本麻希さん、地域コーディネーターの與田千菜美さんがご対応くださり、施設を案内してくださいました。施設としては極めてシンプルな稽古場と説明を受けたとおり、そのことでむしろアーティストごとに自由な表現が可能になる構造となっていることが、現地見学を通して、よく理解することができました。近年は、表現者がアーティスト・イン・レジデンスに求める要素にも変化があり、環境を変えて次作の構想を練ったり、メンバー間で議論をしたり、現地をリサーチしたりすることを目的に、同施設での滞在を希望する表現者も増えているとのこと。同施設では、こうした傾向も踏まえ、令和4年から、アーティストと共に地域の文化や自然をリサーチし、地域住民との交流を通じて作品創作を試みる「K I A C コミュニティプログラム」も実施しており、今後の展開が注目されます。

城崎国際アートセンターが位置する城崎温泉は、豊岡市街から車で20分弱、電車なら10分という立地です。同施設の開館を受けて、城崎温泉の外湯を管理する湯島財産区が、滞在アーティストも地域住民と同じ料金で外湯に入浴できるよう条例改正したことで、アーティストは地域の素顔を知り、地域住民もアーティストの素顔を知るような機会と交流が生まれていることも、城崎国際アートセンターの滞在制作における特筆すべき点です。本市には、松本市街から東に車で20分弱の距離に、浅間温泉と美ヶ原温泉があります。例えば、これらの温泉地で、規模や手法は異なるにせよ、本市独自のアーティスト・イン・レジデンス施設を開設することができれば、地域と文化・芸術を表現者がつなぎ、双方の潜在力を引き出すような実践が実現できる可能性もあるのではないのでしょうか。

3 豊岡市教育委員会

豊岡市役所に豊岡市教育委員会を訪ね、学校現場における演劇を取り入れた教育施策の現状について伺いました。現地では、学校教育課教育研修センター所長の服部隆さんがご対応くださいました。

豊岡市では、城崎国際アートセンターが開館した平成26年の9月から10月にかけて、同施設で滞在制作に取り組んでいた平田オリザさんが、豊岡小学校でモデル授業を実施した際、その様子を見学した当時の石高雅信教育長が感銘を受け、中貝市長（当時）に提言したことを契機に、演劇的手法によるコミュニケーション教育の検討に着手しています。平成27年度には、モデル校5校が演劇的手法によるコミュニケーション教育に取り組み、平成29年度からは公立の全小中学校に展開されました。これは、同年度から同市が、小中連携教育の実効性を一層高める小中一貫教育ヘシフトするにあたり、小中一貫教育として位置付ける取組みの総称を「豊岡こうのとりのプラン」と名付け、「系統性と一貫性のあるカリキュラムで実践するローカル&グローバル学習の時間」の柱のひとつに、「英語教育」と「ふるさと教育」と並んで「コミュニケーション教育」を据えつつ、豊岡市教育振興基本計画に掲げた基本理念「ふるさと豊岡を愛し夢の実現に向け挑戦する子どもの育成 ～非認知能力（やり抜く力・自制心・協働性）を子どもたちに～」の実現を目指す動きの一環として位置付けられています。

以降、豊岡市では、「他者を理解する」「自己を見つめる」「他者と協働する」「表現活動を取り入れ課題に取り組む」の4つの視点を重視しながら、コミュニケーション能力の育成に取り組み、現在も、豊岡市立の全小中学校（小学校22校・中学校9校）において、小学6年生と中学1年生で年7時間ずつコミュニケーション教育として演劇的手法を取り入れた授業が実施されています。さらに、令和4年度以降は全公立校の小学1年生で年3回、令和6年度以降は全公立校の小学2年生で年2回、非認知能力向上対策事業として演劇ワークショップが実施されており、アンケート調査などの結果、児童生徒の非認知能力の向上も確認されているとのことでした。また、コミュニケーション教育の授業の指導案の作成や、教員の事後研究会には、平田オリザさんが関わっていること、演劇ワークショップのファシリテーターは、平田オリザさんが主宰する劇団で、令和2年から平田さん本人と同じく活動拠点を東京都内から豊岡市へと移した青年団の劇団員が担っていることを伺い、改めて豊岡市の文化・教育行政における同氏の存在の大きさを感じました。

今回の聴き取りを通じて、他者を演じる演劇的な表現活動が、自分と異なる考え方や価値観を持つ他者の存在を認識し、他者との違いを受け止めたうえで、自己と他者の考えを擦り合わせ、集団のなかで合意形成を図る、非認知能力の向上に資する、教育現場での実践となっている状況を確認することができました。この演劇的手法によるコミュニケーション能力の育成は、学校教育のみならず、生涯教育の視点からも重要であると考えます。例えば、自分とは社会的な立場や心身の状況が異なる、障がい者や高齢者、あるいは多様な性の当事者に対する想像力や寛容性を養い、地域社会そのものの寛容性を高めるうえで、極めて効果的なのではないのでしょうか。適切な検討期間を設けながら、十分に議論を積み上げ、段階的に導入することが肝要であることは確かですが、本市の学校教育ならびに生涯教育、あるいは文化行政に活かせる視点について、さらに研究を深めるとともに、教育委員会や関係部局との意見交換を重ねていきたいところです。

4 芸術文化観光専門職大学

芸術文化観光専門職大学は、前出の平田オリザさんを初代学長に迎え、令和3年4月に豊岡市に開学した、兵庫県公立大学法人による専門職大学です。演劇やダンスといった舞台芸術の実技を本格的に学ぶことのできる初の国公立大学であり、豊岡市を含む但馬地域にとっては悲願の初の4年制大学の設置でした。

現地では、地域リサーチ&イノベーション推進部地域支援課長の宮田裕史さんがご対応くださいました。学内の施設見学も交え、芸術文化と観光の両軸を行き来しながら学びを深める独自のカリキュラムや、授業全体の約3分の1を占める800時間以上に及ぶ実習を支える学務システムなどについて、説明を受けました。同大学では、芸術文化と観光を活かした持続可能な地域・社会づくりに貢献する人材の輩出を目指しており、そのために座学でインプットした理論を現場でアウトプットする実践の機会として多くの実習の時間を設けていること、そしてその実習のフィールドの多くを地域連携事業として、身近な地域社会のなかに見出し、大学側から開拓していることに、感銘を受けました。また、豊岡市に開設した大学とはいえ、兵庫県立の大学であり、但馬地域にとって念願の4年制大学である、という点に留意し、学びのフィールドが豊岡市内に留まらず、但馬地域全体、兵庫県全域に広がりを持つよう、考慮されている点も、重要であると感じました。

実際、今回の訪問の結びには、但馬地域の3市2町（豊岡市・養父市・朝来市・香美町・新温泉町）、豊岡市については合併前の旧1市5町（旧豊岡市・城崎町・竹野町・日高町・出石町・但東町）のすべてを訪ね、演劇を届けることを目標に活動している学生劇団「但馬旅人生活拠点。」の代表学生による、活動の報告および告知を受けました。演目を上演するだけに留まらず、上演の前後に地域住民と交流する時間を設け、より深く地域を理解しようと努める姿勢から、同大学の教育理念が、在学生によって既に体現されている様子を垣間見ることができました。令和6年度末には、初の卒業生が社会に輩出されることとなり、今後の活躍も期待されることです。

複数の大学と多様な文化・芸術、そしてそれらの礎となっている城下町としての深い歴史に恵まれている本市においては、先人たちが耕し、育み、守り伝え、そして広がりを持たせてきた、多彩な文化・芸術のシーンを、公民学のより豊かな連携によって、さらに深め、また広め、より多くの市民がそれぞれの日常のなかで自ずと接し、親しむことができるよう、さまざまな機会の創出を図っていくことが肝要であると考えます。どのようなネットワークを設計、構築することで、それを実現できるのか、公民学の最適な連携体制について、研究と対話を深め、実践につなげていきたいところです。

5 豊岡アートアクション

前述した、城崎国際アートセンター開設、全公立小中学校へのコミュニケーション教育導入、芸術文化観光専門職大学開学のすべてを牽引、実現した中貝宗治前市長は、市長退任後の令和3年6月、一般社団法人豊岡アートアクションを設立し、現在も民間の立場から継続して、市長在任中に掲げた「深さをもった演劇のまちづくり」に取り組んでいます。今回は同法人の事務所が入居する、老舗料亭をリノベーションした複合施設「とゞ兵」を訪ね、中貝さんご本人にご対応いただきました。

法人設立当初から取り組む認知症ケアについては、認知症を「究極のコミュニケーション障がい」と捉えるなかで、認知症当事者と共に生きていく地域社会の実現に向けて、演劇的手法を活かす試みとして、演劇的介護の探究を進めています。脳科学者の恩蔵絢子さんも伴走に加わるなか、直近では、認知症当事者ではない親子向けに、家族の思い出を語ってもらい、それを前述の芸術文化観光専門職大学の学生たちが演劇に仕立てる、エピソードトークの手法を用いたワークショップも実践しており、将来的には、認知症当事者とその家族向けに、コミュニケーションの土台となる人間関係をほぐすアプローチを説いた冊子を制作し、認知症カフェなどに通う家族向けのワークショップも構築していきたい、とのことでした。一方、その取り組みだけでは、ワークショップ普及の速度と範囲に課題が残るため、豊岡市の介護保険対象に位置付けるなど、行政にバトンを渡していくことも視野に入れている様子でした。

今回の訪問で、詳しくお話を伺うなかで、特に感銘を受けた取組みが、豊岡アートアクションによる、学生支援のプログラムです。ひとつめは、新入生の大半が但馬地域の外から入学してくる芸術文化観光専門職大学の学生に向けて、「豊岡を第二のふるさとに！」と呼びかけ、地域住民とのマッチングを図る交流事業「豊岡ファミリープロジェクト」です。地域に対しては、学生との食事や会話、地域での生活に関する助言や支援を担う「豊岡ファミリー」を募り、それらを必要とする学生とのマッチングを図り、地域と学生の交流を促す仕組みです。ふたつめは、学生による創作活動の支援事業です。芸術文化観光専門職大学の学生団体に対して、申請内容と審査結果に基づき、1公演あたり3～5万円の協賛金を支払うほか、大道具や小道具の調達サポート、広報活動の後方支援など、学生の創作活動をさまざまな角度から支えています。いずれも、「深さをもった演劇のまちづくり」を掲げ、芸術文化観光専門職大学の開学を実現した、中貝前市長が理事長を務める、市民主体の一般社団法人だからこそ実践できる取組みとして、大いに感銘を受けました。

市長在任中、豊岡市が目指す都市像として「小さな世界都市 - Local & Global City -」を掲げ、「人口規模が小さくても、世界の人々に尊敬され、尊重されるまち」と定義した中貝前市長は、著書『なぜ豊岡は世界に注目されるのか』のなかで、次のように記しています。「あるまちが、仮に『小さな世界都市』を目指すとして、『ローカル』のどの部分にどのような光を当て、世界に飛び立つためのエンジンにするのかは、それぞれの地のやり方があります」。本市には、代替不可な地域資源として捉え直したうえで、その価値を深く掘り下げ、広く世界とつながるための地下水脈と位置付けるに足る、自然、歴史、そして文化が、豊富に残されています。先人が築き、つないだ財産を、正しく後世に継ぐために、いま描くべきまちのビジョンと、それに基づくアクションについて、議論を起こし、広げることが、肝要であると考えます。

6 ケアと暮らしの編集社

「ケアするまちをデザインする」をミッションに掲げる、一般社団法人ケアと暮らしの編集社は、医療や介護の職業専門家のみがケアする主体なのではなく、誰もがケアしケアされる存在なのだという認識に基づき、「暮らしの中にケアを編み直す」ことを目指して活動しています。今回は、豊岡駅前の大開通り沿いで社会的処方を実践する、同法人の活動拠点「だいかい文庫」を訪ね、同法人代表理事の守本陽一さんにご対応いただきました。

「だいかい文庫」は、「一箱本棚オーナー」が並べた書籍を貸出す私設図書館と、守本さんたちが選書した書籍を販売する新刊書店に、カフェを併設した複合施設です。店内では、通常の店舗営業に加え、誰もが教え、教えられることのできる市民大学「みんなのだいかい大学」を始め、「居場所の相談所」「喪失のダイアログ」など、地域のつながりで社会的孤独をケアする社会的処方の実践が、多様に企画、運営されています。また近年は、10代の居場所をつくるユースセンター事業として、同じ豊岡市街のコミュニティシネマ「豊岡劇場」と連携して始めた「本と映画 テルル」にも取組んでいます。書籍、カフェ、映画などと掛け合わせた、これらの実践はいずれも、暮らしのなかで触れる文化・芸術が地域住民をケアする可能性に着目している、守本代表理事ならではの事業展開であると、現地を訪れたことで、改めて感じました。

広い市域と合併の歴史を有する本市においては、それぞれの地域の特性に応じて、地域とのつながりによる社会的処方も、文化・芸術を通じたケアの実践も、適切なあり方を探っていく必要があると考えます。地域づくりセンターが核となり、地区生活支援員や地区担当保健師との連携は元より、地域の多様な主体や住民活動との協働も含め、社会的孤独をケアする社会的処方のネットワークを柔軟にコーディネートしていく必要があるのではないのでしょうか。自然の豊かさと歴史の深さを背景に、確かな自治の精神と多様な文化・芸術が育まれてきた本市においては、複数の大学と医療機関に恵まれている環境も活かし、公民学に医を加えた独自のケア連携システムを構築し、国内外にモデルを示す実践が展開されていくことに、期待を寄せたいところです。

7 おわりに

以上、現地での訪問順に、その成果および所感を述べ、調査結果を報告しました。今回は、本市の豊富な地域資源である文化・芸術を教育などと掛け合わせ、次世代を担う子どもたちの学びの充実を図る制度設計が不十分である、という課題認識に基づき、その改善を進める際の要点を把握すべく、この取組みにおける先進自治体と捉える豊岡市での具体的な実践状況について、直接当事者から聴き取ることが必要と考え、現地調査を行いました。

今回の現地調査を通して、平成29年度に演劇的手法を取り入れた授業をコミュニケーション教育と位置付け、市内すべての公立小中学校で導入した豊岡市では、現在も市内すべての公立小中学校の小学6年生と中学1年生で、コミュニケーション教育として演劇的手法を取り入れた授業が継続実施されているだけでなく、令和4年度以降は全公立校の小学1年生で、令和6年度以降は全公立校の小学2年生で、非認知能力向上対策事業として演劇ワークショップが実施されていること、並びに、児童生徒の非認知能力向上を示す調査結果も伴っていることを、確認することができました。また、演劇的手法によるコミュニケーション教育の可能性をいち早く見抜き市長に提言した教育長の先見性と、その熱意を受けて段階的な制度設計と予算化を図った市長の決断、さらに、この制度の持続性を下支えする専門性を民間側から惜しみなく提供する専門家（平田オリザさん）の知見が、見事に噛み合い、連動して、豊岡市の学校教育における演劇で学ぶ非認知能力向上に係る事業がスタートを切り、拡充しながら、継続している状況を、理解することができました。そして、たとえ首長が改選されても、学校教育の現場がこの事業の必要性和重要性を認識している限り、一度転がり始めたボールはそう容易く止まらないこと、そのためにも、教育委員会が市長部局から一定の距離を保ち独立していることが肝要であることを、学ぶ機会にもなりました。

中貝前市長は、前出の著書『なぜ豊岡は世界に注目されるのか』のなかで「『小さな世界都市』の世界の人々とのつながり方」を「地下水脈でつながる」と表現し、次のように記しています。「自分たちの地域の自然、歴史、伝統、文化をひたすらに掘り続けていると、やがて地下水脈に行きあたり、その地下水脈を通じて（中略）世界の各地で自分の足元を掘り続けている人々とつながっていった」。新自由主義に基づくグローバル経済が行き詰まり、世界情勢がますます混沌を極めていくなか、次の時代の新たな世界のあり方を探る道は、清らかな地下水脈でつながる「小さな世界都市」同士のたゆまぬ対話を深めることにこそ、見出せると考えます。ローカルのオリジン（起源・地域資源）を極めようとするローカル間の対話に、本市も意気揚々を加われるよう、本市独自の自然、歴史、文化・芸術の価値を磨き続け、複数の大学と医療機関にも恵まれる環境を活かしつつ、公民学に医を加えた、市民をケアする独自の地域連携システムを構築し、国内外にモデルを示す未来のビジョンを、いまこそ描きたいところです。